

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKE

2015. 1 No.83

トピックス

特別展の開催
文化財めぐりの実施
徳守神社鉄盾、市重文に指定

資料紹介

安東次男の自筆原稿 梶村 明慶

研究ノート

津山藩の大名行列図は
何のために作られたか？ 小島 徹

お知らせ

刊行予定／江戸一目図の公開



特別展の開催 10月4日～11月3日

津山の商家が

伝えた文人画

ひろせ たいざん いろいろかちくさい ～ 広瀬台山と飯塚竹斎 ～

かんた
菟田家コレクションより

菟田家は城東地区にあり、江戸時代から続く商家です。このたび菟田家からその住宅を津山市に寄付され、それにあわせて古文書や書画類の多くが寄贈されました。この書画類の中には、津山を代表する文人画家広瀬台山や飯塚竹斎の作品も数多く含まれています。この展覧会では、菟田家の書画類の中から広瀬台山と飯塚竹斎の文人画にスポットを当て、津山の商家菟田家が守り伝えてきた絵画コレクションの一部を展示しました。

会場入口では菟田家の歴史を当主の肖像画などを踏まえて紹介しました。続いて絵画作品を紹介し、今回当館で初めて一雙そろえて公開した、広瀬台山の「春秋山水屏風」をはじめ、合計19点を展示しました。津山を代表する文人画の数々を、来館された方々も熱心に見入っておられました。

今回の展覧会を開催するにあたり、資料を寄贈いただいた菟田善嗣氏をはじめご協力いただきました皆さま、また、本展をご覧くださった皆さまに改めてお礼申し上げます。

どれも
見ごたえのある
作品だったね



博物館キャラクター
お
「パレ夫」



みんなは
どの作品が
気に入ったかな？



博物館キャラクター「ファイアー」

文化財めぐりの実施

第103回 勝北地域（新野山形周辺）

第103回の文化財めぐりを昨年10月18日に行い、新野山形周辺を歩いてめぐりました。この地域には、美作建国1300年記念事業でおとし復元した陶棺が出土している水原古墳、また、岡山県重要無形民俗文化財に指定されている新野まつりの神事場や親神の八幡神社などがあり、古くから連綿と続く歴史のある場所です。当日は晴天にめぐまれ、参加者の方々は秋の歴史散策を楽しんでおられました。



徳守神社の鉄盾

市重文に指定



この鉄盾は、初代津山藩主の森忠政が大坂の陣での使用後に徳守神社へ奉納したと伝えられています。大坂の陣に際し、森忠政が鉄盾を賜ったとする記録があり、実際にこの鉄盾には深さの異なるくぼみや、弾が貫通して割れたと思われる穴があります。重量は15kg、一対で30kgあり、片方にはふたの付いた小さなのぞき穴が取り付けられています。

森忠政ゆかりの資料であると同時に大坂の陣に関連した貴重な歴史資料として、昨年9月25日に津山市の重要文化財に指定されました。



博物館キャラクター
「鶴若」

銃弾のあとが
とても
生々しいね!

安東次男の自筆原稿

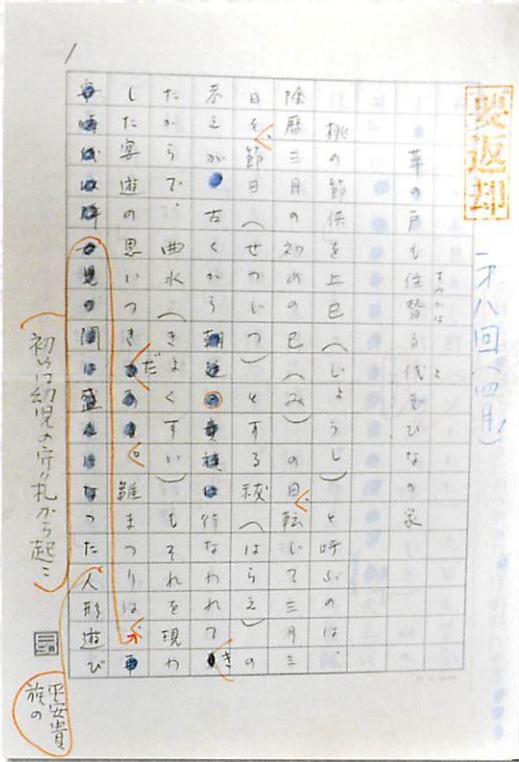
梶村明慶

写真は安東次男の自筆原稿です。詩人・俳人として知られる安東次男は、大正8年（1919）現在の津山市沼に生まれました。東京帝国大学を卒業し、戦後は都立桜町高等学校の社会科講師、國學院大学のフランス語講師などを経て、東京外国語大学の教授を勤め、平成14年（2002）にこの世を去りました。

俳句を加藤楸邨に学びましたが、後に詩に転向します。サガンの『悲しみよこんにちは』の最初の翻訳者であり、銅版画家の駒井哲郎と共同制作した『CALENDRIER』と『人それと呼んで反歌という』は、日本最初の本格的な詩画集として高い評

価を得ています。一方、日本の古典にも心を傾け、『風狂始末―芭蕉連句新釈』などを出版しました。

この原稿は昭和61年（1986）に筑摩書房から出版された『芭蕉発句新注 俳句の読み方』のもので、鉛筆書きの文字に赤鉛筆等で修正が加えられており、安東次男の執筆・推敲の様子をうかがい知ることが出来る貴重な資料です。このたび安東次男に縁のある方から、彼の故郷の博物館へということ、津山市沼に立つ句墓碑に刻まれている句「蝸といふ名の裏山をいつも持つ」の自筆の書とあわせて寄贈いただきました。



原稿に見える校正の跡

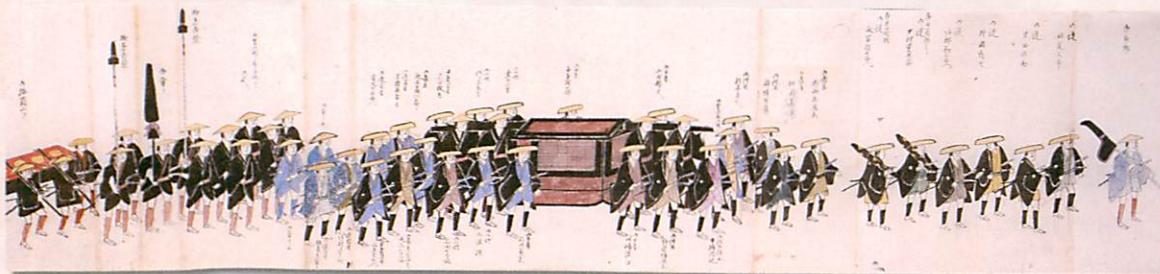


刊行された『芭蕉発句新注』と自筆原稿

津山藩の大名行列図は何のために作られたか？ 小島 徹



襖図全7枚のうち藩主乗物を描いた1枚 タテ95cm×ヨコ191.5cm



絵巻図のうち藩主乗物を描いた部分 タテ25.5cm

はじめに

江戸時代の大名による参勤交代については、それを主題とした映画が公開されるなど、世間での関心が高まっています。津山藩松平家については、参勤交代する時の大名行列を描いた図として、次の2種類が知られています。

①「拾万石御加増後初御入国御供立之図」襖仕立て全7枚、以下「襖図」と略記。

②「拾万石御復帰後初御入国御行列図」絵巻全3巻、以下「絵巻図」と略記。これらの図が作られた経緯については、襖図の方に「明治17年（1884）5月」の年紀と平井真澄はじめ作成に関わった旧藩士の名が記されるだけですが、当時の松平家記録によると、前年11月に博物館（現・東京国立博物館）史伝部が「各華族旧幕府之時行列莊儀之図面及次第書」等の調査を旧大名家に依頼しており、これを受けて行列図の巻物作成に取り掛かった様子が記されているので、この時に作られた巻物が現存の絵巻図ではないかと推測できます。襖図については、愛山東照宮の拜殿（現・地藏院本堂）に掲げられていたと伝わりますが、博物館の依頼に応じるのは絵巻図の作成だけで事足りるはずです。本稿では、この襖図がなぜ作

られたのかを考えてみます。

1. 画題の確認

まずは、図に描かれる行列の内容を確かめておきましょう。題名にあるとおり、これは松平家が10万石に増された後に初めて、当時の藩主斉孝が帰国した時の行列を描いたものです。5万石の時期が長く続いた松平家の10万石復帰は文化14年（1817）、その翌年（文政元年）がちょうど帰国する年回りで、久しぶりに10万石の格式で帰国できたのです。松平家としては、祝福すべき10万石復帰を実感できた帰国の旅であつたことでしょう。

そして、長年の悲願である10万石復帰がかなつたのは、藩主斉孝が將軍徳川家斉の子息を養子に迎えることができたからでした。文化14年9月18日、家斉の14男とも16男ともいわれる銀之助を斉孝の婿養子とするよう申し渡され、10月7日に5万石加増が伝えられたのです。

2. 銀之助の誕生と津山の東照宮

松平家の養子となつた銀之助は、文化11年（1814）7月29日、戸城大奥で誕生しました。8月15日



旧愛山東照宮社殿 今は地蔵院の本堂として使われ、神仏混淆で祀られています。

には、その名とともに出生が幕府から公表され、9月5日に津山でも松平家中に触れ出されています。

この時期、津山では松平家の威信をかけた事業が進行中でした。それは、津山に勧請していた東照宮の新しい社殿の造営です。それまでは、城下愛山にある天台宗寺院の地蔵院で祀っていたものの、独立した社殿を有していませんでした。8月27日に棟上げの式典が行われ、その翌日には境内への石砂搬入を有志の町人に従事させるよう町奉行から指示が出されています。9月15日には落成した社殿を大目付はじめ担当が見分し、翌16日に「東照宮」の神号額が奉納されたうえで遷宮式が挙行され、17日からは5日間にわたって東照宮の200回神忌の取り越し法要が厳粛に執り行われたのです。

東照大権現として神に祀られている徳川家康がこの世を去つたのは、元和2年(1616)4月17日です。から、200回忌は文化12年(1815)4月に当たりますが、その時期に藩主斉孝は江戸へ参勤せねばならないため、藩主が津山にいるこの時期にその法要を先んじて行うべく、社殿もそれに間に合うように造営されたものと考えられます。

江戸幕府の創業者である家康は、將軍家が日光や久能山で神に祀つただけでなく、諸大名もその領内に勧請していたのですが、津山藩松平家にとっては直系の祖先にも当たるのですから、200回忌という節目にあ

わせて畏敬・崇拜の意思を形に表したいと考えたのでしよう。その思いが東照大権現に伝わったのか、奇しくもその時期に將軍家に誕生した銀之助を養子に迎え入れて、松平家は10万石に復帰できたのです。きつと松平家の人々は「東照宮のあらたかな靈験」を強く意識し、感謝したことでしよう。

3. 作成当時の松平家

この図の年紀が「明治17年5月」であることは先に触れましたが、この時期に松平家では大きな行事がありました。それは、旧津山藩主松平確堂の墓参のための津山入りです。彼にとって実に19年ぶり、滞在期間半月のこの津山入りは、単に墓参だけでなく、旧臣との対面や社寺参詣、小学校の見物など、かなり多忙な日程が組まれていました。松平家の記録に、この行列襖図のことは何も触れられてはいないのですが、この図が確堂に披露されたのはまず間違いのないと思われます。それは、この確堂こそ、5万石を手土産に松平家に養子入りした銀之助本人であるからです。この図に銀之助は描かれていませんが、彼の存在なくしてこの図の作成はなかつたといえます。江戸時代、松平家の数ある行列の中で、10万石復帰の翌年の帰国行列が画面に選ばれた背景には、銀之助(確堂)との縁を感謝する旧臣たちの思いがあ



松平確堂(1814~1891) 写真は個人蔵
銀之助は順調に成長して8代藩主斉民となり、
隠居後に確堂と名乗りました。

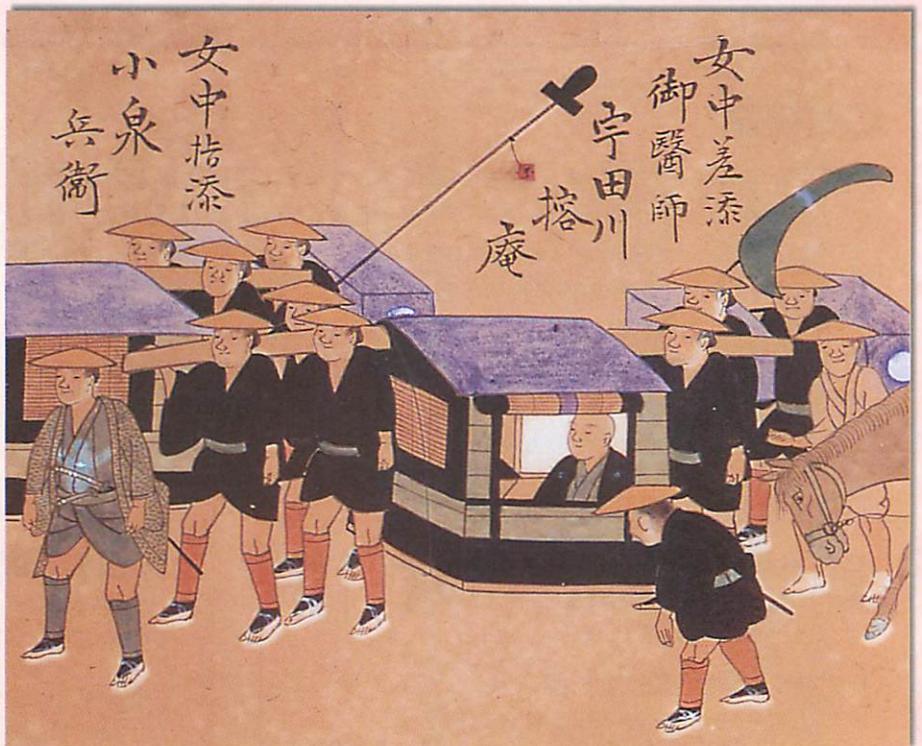
結集しているように思えます。
そして、彼はこの年古稀(70歳)を迎えていました。若死にの当主が多かったために、家の存続が危ぶまれることが多かった松平家にとつて、これほど長寿の当主はまさしく稀でした。先に触れたとおり、津山の愛山東照宮社殿は彼と同一年に当たります。これらの状況証拠から想像すると、おそらく襖図は確堂の古稀と愛山東照宮社殿の建立70周年を記念して、最初から社殿に奉納・掲示することを意図して作成されたのではないでしようか。作成に関わった旧臣たちにとつて、東照宮社殿への奉納はすなわち確堂への奉呈を意味したものとされます。確堂の19年ぶりの津山入りも、この図をぜひとも披

露したいと旧臣たちが松平家に働きかけて実現したものかもしれません。

おわりに

襖図・絵巻図ともに、描かれている行列の内容は詳細で、供の家臣たちの役職・氏名だけでなく荷物に至るまで詳しい説明がほどこされています。そればかりか、本隊出発の前日や3日前・5日前に江戸屋敷を出発した先遣隊までが描かれているのです。これほど詳細に描き込まれたのはなぜでしょうか？

3日前に出発した部隊に目を凝らすと、「女中差添御医師」の肩書で行し、駕籠に乗った宇田川榕菴の姿



襖図のうち宇田川榕菴の駕籠の部分

が見えます。彼は松平家お抱えの蘭学者で、この行列に加わった当時、まだ家督相続前の20歳でした。やがて銀之助が元服して斉民と名乗り、藩主として活躍する頃になると、『植学啓原』や『舍密開宗』など近代科学を日本にいち早く紹介する著作を出版し、その名を高めました。榕菴を含めて数人は駕籠の側面に開いた窓から顔が見えるのですが、さらに榕菴の駕籠だけは、折りたたみの文

机らしきものが起こされていて、彼が蘭学者であることを意識した描写と考えられます。
これはまったくの想像ですが、この時の行列に榕菴が付き従っていることを知った作成関係者は、確堂の藩政担当時期と活躍時期が重なる有名な蘭学者をぜひとも描き込みたいと考えた結果、彼を含めて先遣隊までも詳細に描くことに決めたのではないでしようか。

できあがり
楽しみだなあ

津山城の解説書を刊行します

～2月末刊行予定～



博物館キャラクター
つきよりのすけ
「津郷之介」

津山城の構造や築城から廃城までの過程など、津山城についてわかりやすく一冊にまとめた本を刊行します。現在博物館で販売している津山城に関する書籍は、絵図や古文書の翻刻を掲載した専門的な内容であり、以前から「津山城についてわかりやすく解説した本はないか」という声をいただいていた。このようなご要望にお応えできるよう、写真や図を数多く掲載し、かつ安価な本にする予定です。どうぞご期待ください。

江戸一目図屏風の実物公開

平成27年度は4～5月頃、江戸一目図屏風の実物を公開する予定です。秋には貸出の予定があり、津山での公開は春だけとなります。

江戸一目図はとても細かく描き込んであり、何度見ても興味の尽きない作品です。お花見の際は、ぜひ博物館にもお越しになり、一目図の中で花見に興じる江戸の人々の姿も見ていただければと思います。



江戸一目図屏風より桜咲き誇る飛鳥山の部分 ▶

編集後記

- ▼新たな年が始まりました。本年もよろしくお願いいたします。冬場は客足が鈍る時期、天候の悪い日は外出を控えがちですが、当館に限らず博物館や美術館でゆっくりと展示鑑賞したい時は、観覧者の少ない日がおすすです。当館では、江戸一目図屏風の実寸大複製を常に展示していますので、江戸一目図を独占することも可能です。
- ▼昨年9月に発行した平成25年度の年報の巻末論文、橋本惣司「古代美作道を検証する」は美作の古代官道研究に一石を投じる意欲的な論文です。橋本氏は市内在住の元学校教員で、熱心に郷土史を研究されている方です。おととしの美作国建国1300年記念事業として行われた陶棺復元プロジェクトにも関わっていただきました。
- ▼当館のホームページでは、博物館だよりのバックナンバーや津山市史のPDFデータを公開しています。文字検索が可能なデータですので、実物をお持ちの方もぜひご自分のパソコンにダウンロードしてご利用ください。検索の能率が格段に向上します。

土 博物館だよりの「つはく」
No.83 平成27年1月1日

津博
TSUJIBOKU

〔編集・発行〕津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

〔印刷〕有限会社 弘文社

入館のご案内

〔開館時間〕午前9:00～午後5:00

〔休館日〕毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

〔入館料〕一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。